

論文の内容の要旨

論文題目 社会化現象の経験的記述
——その過程・境界・達成を対象領域として——

氏 名 森 一平

本論文の目的は、「社会化」という現象が人びとの実践の領域においていかなるしかたで組織化されているのか、このことを経験的に記述・分析し、明らかにすることである。

第Ⅰ部「社会化の経験的記述に向けて」（1・2章）では、社会化現象の経験的記述に踏み出すための準備作業をおこなった。「社会化」は、社会学——とりわけ教育社会学の領域においてもっとも基礎的な概念の1つとなっている。しかし他方で社会化は、（教育）社会学において極めて重要な現象であるにもかかわらず、あまりに基礎的な概念になってしまったがゆえにか、しばしば別の現象の説明語彙として用いられることはあっても、それそのものが経験的研究の対象として設定されることはほとんどなくなってしまった。

このことの背景の1つには、現在流通している社会化の一般的な規定が極めて曖昧なものであり、それをもとに経験的研究へと踏み出していくことが困難であるということがあるように思われた。それゆえ第1章では、社会化論の歴史上もっとも大きな影響力を持ち続けてきたパーソンズ社会化論の検討からはじめ、パーソンズに至るまでのアメリカ社会化論の歴史や、数多くの著述家たちの社会化概念を1つのモデルへと統合したヴォルフガング・ブレツィンカの仕事を順次検討していくことで、社会化概念を「規範の教授 - 学習」という経験的に同定可能なかたちへと規定しなおし、また同時に規範の教授 - 学習を中心とする3つの探求領域——その過程・境界・達成——をあぶり出していった。

第2章では、本稿が社会化現象を経験的に記述・分析していくさいの方針を提示した。本稿ではその研究方針として、あらゆる学的なトピック——もちろん「社会化」もそこに含まれる——を人びとの実践の方法論として再特定化するというエスノメソドロジー

の研究方針を採用している。そのうえで本稿ではとりわけ、会話分析という研究領域を切り開いたハーヴィ・サックスらによる次のような考えかたに依拠することにした。つまり、人びとの実践の自然な記述＝理解可能性から出発し、その理解可能性を構成する「しかけ」——方法的秩序を記述することで、実践の分析が可能になるという考えかたである。

本稿の記述方針の特徴は、この「しかけ」をそれが埋め込まれた当の実践から切り離さなせずに提示するという点である。この方針のもとでは、単一の事例がそれぞれ深く検討される。それゆえ本稿では、例えば学級の心理学的研究のように複数の事例を渉猟することで実践の「変化」を描き出すこと——「構築的分析」——はできないが、他方で人びとが実践をかたちづくるための道具を、その使いかたとともに示すことが可能となる。

こうした研究方針にもとづきながら、第Ⅱ部「規範の教授 - 学習過程としての社会化」(3・4章)ではまず、社会化の「過程」の記述をおこなった。幼稚園3歳児学級でのやりとりを事例として分析した結果、第3章では「同一のことがらに共同で注意を向けること」、第4章では「きちんと座って見聞きすること」という、それぞれ学級においてさまざまな活動がなされていくための基礎となる行為規範が、とくに「指示」 - 「応答」 - 「評価」(DRE)という行為連鎖の秩序によって伝達可能にされていることが明らかとなった。

DREのように3つ組の行為の規範的な結びつきからなる装置は、ミーハンの議論を通して「質問」 - 「応答」 - 「評価」(IRE)という形式のもとで一躍有名となった。ただしIREという連鎖形式は、あらかじめ成立している学級的秩序のもとでとくに作動する形式である。子どもたちの多くが初めて学級へと参入することになる幼稚園3歳児学級においてはしかし、こうしたあらかじめの秩序に頼ることはできない。そこにおいてはそもそも、学級的秩序を1からかたちづかっていく必要に迫られる。そうしたなかであって、子どもたちに適切な応答として特定の「行為(の修正)」を要求するDRE連鎖は、その場の学級的秩序を生成・維持しながら、同時にそこで示された行為規範を伝達することで未来の学級的秩序の再生産を可能にする、二重の意味で学級での活動を支える装置たりえていた。

第Ⅲ部「社会化可能なものの境界」(5・6章)では、社会化の「境界」に関わる現象の記述をおこなった。社会化論の歴史を1つの角度から眺めてみるならばそれは、社会化の「内部」と「外部」とを区別する境界線をいくども引きなおしてきた歴史でもある。このことを踏まえたうえで第5章ではまず、過去の社会化論においてしばしば社会化の「外部」に位置づけられてきた「主体性」と、社会化との関係性が論じられた。ハーバーマスの議論を導きに、主体性概念を2つの要素——規範の「自律的な適用能力」および「自律的な解釈能力」——へとブレイクダウンしたうえで、小学校1年生の「国語」の授業場面を事例として検討した結果、こうした主体性の2つの要素についてもそれを育成するさいには、規範の教授 - 学習過程が介入するということが明らかになった。ただしその社会化の過程は、児童たちの主体性をときに配慮しながら、当の主体性を下から支えるような規範を伝達するという課題に特化した、独特な相互行為デザインのもとで——すなわち、児童たちの発言が正解も不正解もない「想像」であることを利用した／に配慮した順番交代の組織、および修復・訂正の共作動デザインのもとで——とりおこなわれていた。

次いで第6章では、社会化の「内部」と「外部」の区別を、(社会化によって)「変えられるもの」/「変えられないもの」という区別に託し、その境界線が実践者みずからの手によって引かれていく場面を検討した。事例として取り上げられたのは、ある薬物依存者Aさんによる、薬物依存からの「回復」をめぐる語りである。Aさんにとって「変えられないもの」とはクスリへの「欲求」であり、「変えられるもの」とはこのクスリへの欲求を実際の薬物使用へと昇華させてしまうトリガーとしての、「具合が悪くなる」ということ——仲間との関係悪化を恐れるがゆえにネガティブな本音を打ち明けられず、その本音がみずからのうちに蓄積してしまうこと——である。Aさんはこのように、みずからの権利で「変えられるもの」と「変えられないもの」を区別することによって、「変えられるもの」を変えていくための社会化のありかた——ほかの仲間と相談したうえで本音を打ち明けに行くという「練習」——を同時に、薬物依存からの「回復」へと向けて規定していた。

第IV部「知識と道徳」(7章)では、社会化の「達成」が帰属されるさいの条件を問うていった。社会化を規範の教授-学習として捉えてきた本稿の立場からすれば、社会化の達成とはまずもって規範を「知っている」ということである。そこで第7章ではまず、幼稚園3歳児学級でのやりとりを取り上げながら、「知識の確認」のために運用されるIRE連鎖が駆動するさいの条件のなかに「知っている」ということそのものの帰属の条件を探求していった。その結果明らかになったのは次のことである。学級という場において知識確認のためのIRE連鎖が駆動するさいには、逆説的にも当の学級の構成員である子どもたちのいずれかが問題となっている知識を「知らないかもしれない」ということが、条件として与えられている必要がある。そのうえで、問題となっている知識が「規範」である場合にはこの条件が、子どもたちの規範に「従わない」行為のなかにある特殊なしかたで——規範を「知らない」からそれに従えないのか、「知ったうえで」それに従わないのかを区別することが困難である(それゆえ「知らないかもしれない」)——立ち現れていた。

ここに示されているのは社会化の達成地点の二重性である。すなわち、社会化が達成されたと言えるためには個人が規範を「知識」として知ったうえで、さらにその規範に否応なく従う「道徳」性を身につけているのでなければならない。そしてこのように社会化の「達成」が二重化しているなら、社会化の「過程」もまた二重化しているはずである。つまり、規範に従う道徳性をそのなかで与える第2の社会化過程が存在するはずだ。第7章後半ではこの第2の社会化過程がいかにして組織されているのかを、小学校1年生の「生活」の授業における「叱責」のやりとりを事例として取り上げながら検討していった。

第V部「結論」(終章)では、本論文全体のインプリケーションを提示した。終章では、本稿が第II部から第IV部までにおこなってきた経験的記述を経ることにより、第I部で差し当たりのものとして採用されていた社会化の経験的研究のための見取り図——規範の教授-学習の過程・境界・達成——が、二重に構造化された規範の教授-学習過程を中心とする、複層的/輻輳的な言語ゲームネットワークという姿へと更新されたことを示した。

この見取り図の更新が含むインプリケーションは次のとおりである。第1に、社会化

の過程は単に規範の教授 - 学習を遂行するのみならず、同時にさまざまな実践的課題に対処しながら進行する。第2に、社会化の内部／外部を区別する権利は実践者たち自身の手元に（も）あり、その結果社会化の内部に取り込まれたものはなんであれ、それに応じた巧みな方法論によって教え - 学ぶことができる。第3に、社会化の過程および達成は「知識」と「道徳」の区別を媒介に二重化している。社会化によっては規範が「知識」として習得されるだけでなく、その規範に否応なく従う「道徳」性もまた身につけられねばならない。

終章では最後に、本稿で示してきたような社会化の経験的研究が、1970年代以降停滞していた教育的知識の社会学研究プログラムを再度引き受けうるものであることを論じた。